

展示をめぐる視点

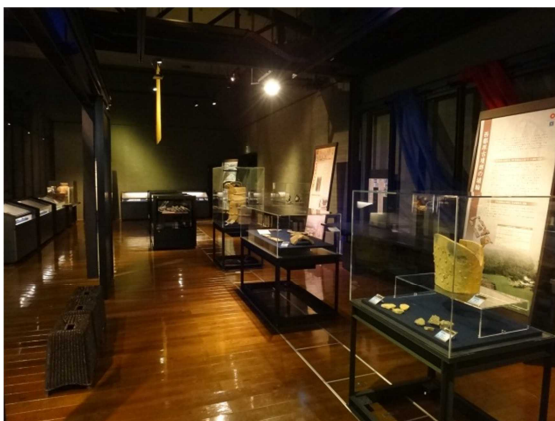
今春の人事異動で西都原考古博物館に勤務することとなった。

これまでのコラムでも何度か紹介されているが、今年（2014年）は当館にとって開館10周年という節目の年で、かつ宮崎県教育委員会が2012年から展開してきた「交差する歴史と神話 みやざき発掘100年」の最終年度にもあたるため、事業の集大成として位置づけた特別展「西都原の100年 考古博の10年 そして次の時代へ」の開催を控えており、準備作業がまさに山場にさしかかったところへの赴任であった。過去に県埋蔵文化財センターでのごく小規模な展示を手がけた経験はあるものの、これほどの質・量を兼ね備えた展示に関わるのは初めてであり、着任早々から目が回るような毎日であった。

展示作業、あるいはその合間の同僚との会話を通じ、改めて考えさせられたのは「展示をめぐる視点」についてである。とはいえ、どんなテーマに沿ってどの資料を並べるのか、という館側の視点ではなく、来館者は展示された資料をどのように見るのか、を意識しはじめたのである。展示の原則を言葉にすれば、「見せたい部分が最もよく見えるように」となるのだろうが、突き詰めるとこれがなかなか難しい。10cm程度の上げ下げで物の見え方は大きく変わるし、そもそも来館者の視線も様々である。さらに年齢や関心が異なれば、おのずと見たい部分も違ってくるものだ。それでも我々は、「全ての人々にとって見やすい展示とはどのようなものか」を考え続けなければならないのだろう。

こうしている今も、世界各地で様々な展示が実施されているが、いずれも担当者が試行錯誤の末にたどり着いた一つの解答なのだと思う。だから、もしアンケート等が実施されていれば、展示の内容はもちろん、その「見やすさ、見づらさ」という視点から御意見をいただくと博物館にとって有意義であるし、時には来館者がどのように展示資料を見ているかという視点で展示室を眺めていただくのも面白いかもしれない。余談ではあるが、展示資料と正面から向き合って、不自然に腰をかがめ、真横（水平方向）からの視点で資料を見つめているような場合、その方はほぼ間違いなく考古学研究者である。

（堀田孝博）



現在開催中の展示会からの一コマ